



## 韓国と日本における小学校体育科教育課程の比較： 体力・運動能力の差異に着目して

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2016-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 秋月, 茜, 神林, 勲 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/00006477">https://doi.org/10.32150/00006477</a>

## 韓国と日本における小学校体育科教育課程の比較

— 体力・運動能力の差異に着目して —

秋月 茜・神林 勲\*

北海道医療大学大学院博士課程リハビリテーション科学研究科

\*北海道教育大学札幌校保健体育教育研究室

## Comparison of Korean and Japanese Physical Education Curriculum in Public Elementary Schools

Focusing attention on the difference of physical fitness and athletic ability

AKIZUKI Akane and KAMBAYASHI Isao\*

Graduate School of Rehabilitation Sciences, Health Sciences University of Hokkaido

\*Physical Education Laboratory, Sapporo Campus, Hokkaido University of Education

### 概 要

文化や生活習慣，教育に至るまで韓国と日本は類似点の多い国である。そのため，教育現場で生じる問題にも同様の傾向が見られ，中でも子どもの体力低下は深刻な問題である。しかしながら，近年日本では僅かではあるが改善傾向が認められる。これは体育科教育課程の違いも一要因として考えられる。そこで，両国の小学5，6年生を対象に体力・運動能力の測定を実施し，その結果を両国の体育科教育課程の観点から考察を行った。その結果，韓国児童が体格は大きい，体力・運動能力は劣っていた。韓国体育科教育課程に関しては，目標では体力向上や健康の保持増進を掲げているにもかかわらず，授業時数は増減が可能であり，運動内容の詳細設定は学校や教師に委ねられているなど，学校体育の形骸化や学校による格差の発生が懸念された。よって，学校外での身体活動経験が多く見込めない韓国児童においては学校体育の充実を図ることが重要であると示唆された。

### 緒 言

大韓民国（以下，韓国とする）と日本は地理的に近いというだけでなく，同じ漢字文化圏であ

り，言語やさまざまな文化，生活様式に至るまで類似点の多い国同士である。また，文化的，地理的側面のみならず両国の教育に関しても類似点が数多く認められる。例えば，第二次世界大戦後，

両国ともにアメリカの学制を手本とし、当時の教育制度の基盤を構築した点や、韓国では「日帝強占期」と呼ばれている‘韓国併合’により日本の教育が現在の韓国の教育に大きな影響を与えた点（이다영・구봉진, 2011）が挙げられる。このような、両国の現代の公教育の歴史を顧みても、韓国の教育政策は日本と同様な時代の流れのもとで進められている傾向がある。そのため、教育現場で発生する問題に関しても類似する場合が多く、入学試験中心の教育風土による学歴社会やいじめ、校内暴力などの問題が韓国でも発生している。

子どもの体力や肥満の問題も深刻化している。特に、体力に関しては1970年頃から長年にわたって健康の保持と体力の増進を体育科教育課程の重要な目標としてきたにも関わらず、弱化の傾向にあることが報告されている（이양구, 2012）。毎年韓国国内で小学生から高校生を対象に行われている体力検査においても、体格は昔と比べて向上しているものの、2000年度と比べて2008年度は全6種目[50m走、腕立て伏せ（男）・懸垂（女）、上体起こし、幅跳び、長座体前屈、長距離走]の値が低下しているという結果（佐々木, 2011）や、小学生の肥満度を算出した結果では、2008年から2011年にかけて男女ともに肥満度が増加している（교육과학기술부, 2012）という報告からも韓国が抱える体力や肥満の問題が深刻なことが伺える。このような問題の背景として電子媒体使用機会の増加、交通および技術の発達による日常生活の利便性の向上、家庭などにおける過度な教育熱の高さによる子どもたちの学習時間の増加とそれに伴う身体活動機会の不足が認められている（이옥선・전세명, 2012）。

一方で、様々な観点から類似点が多く認められている日本において、子どもの体力や肥満の問題について最近では、小学校高学年以上の年代において緩やかな向上傾向が見られる（文部科学省, 2011）、肥満傾向児の出現率について減少傾向が見られる（文部科学省, 2014）など改善の傾向を示している。このような改善傾向の背景には、平成20年に改訂された学習指導要領体育編において

「体づくり運動」を小学校から規定し、発達の段階等に応じて指導内容を整理し、体系化を図り、より一層の体力向上を重視した事などが挙げられる。さらに、文部科学省においても各学校で実施された体力向上プログラムを紹介するなど、学校体育の取り組みや体育科の学習指導要領が大きく関係していたと考えられる。

このようなことから、韓国および日本における体力低下問題等の要因の一つとして体育科教育課程の違いが考えられる。そのため、本研究では韓国および日本の小学5、6年生の体力・運動能力の測定を実施し、その結果を両国の小学校体育科教育課程を比較した観点から考察することを目的とした。そのことにより、今後の韓国における体力低下や肥満問題をはじめとした体育に関する諸問題の改善を目指すための知見を得ることも同時に試みた。

## 方 法

### 1. 対象者と測定時期

韓国の釜山広域市にあるJ小学校5、6年生男子91名、女子76名、および日本の北海道札幌市にあるH小学校に在籍する5、6年生男子72名、女子73名の計312名を対象とした。測定は2014年の6月から7月に実施した。なお、本研究を実施するにあたり、事前に調査対象学校の関係者と綿密な調査計画を立てるとともに、保護者や対象者に対して、本研究の目的、方法および安全性について説明し、研究への参加の同意を文書により得た。本研究は北海道教育大学の研究倫理委員会の承認を得て実施した（北教大研倫2014051002）。

### 2. 体格と体力・運動能力の測定

体格は身長および体重を測定し、体格指数（以下、BMIとする）を算出した。体力・運動能力として、文部科学省準拠新体力テストの8種目（握力、上体起こし、長座体前屈、反復横跳び、20mシャトルラン、50m走、立ち幅跳び、ソフトボール投げ）を実施した。また、実測値より換算表を

用いて体力得点を算出し、その総計を体力合計点（以下、合計点とする）として、対象児童の体力・運動能力の指標とした。なお、本研究では5年生と6年生を小学校高学年としてまとめ、学年間毎の比較は実施せず、両国の男女の違いについて検討した。

### 3. 体育科教育課程

韓国の文献については、교육과학기술부 고시 제 2011-361호 [별책11] 체육과교육과정（教育科学技術部 公示 第2011-361号 [別策11] 体育科教育課程）を筆者自らが翻訳し参考とした。また、日本の文献については文部科学省の平成20年小学校学習指導要領解説体育編を参考とした。両国の小学校における体育科教育課程について、以下の5項目（①目標 ②時数 ③運動領域の内容構成 ④指導・学習方法 ⑤評価）について比較を行った。

### 4. 統計処理

体格および体力・運動能力の結果は、平均値±標準偏差で示した。群間の差の比較においては、対応のないt検定を行った。なお、有意水準は5%未満とした。

## 結 果

### 1. 体格および体力・運動能力について

表1に示したように、体格については男女ともに身長、体重およびBMIのいずれも、韓国児童が日本児童に比べて有意に高値を示した。

体力・運動能力の評価として、両国の合計点を比較した。男子の韓国児童の値54.0±8.6点は、日本児童の値57.0±7.4点よりも有意に低値であった。また、女子においても韓国児童の値53.4±8.5点は、日本児童の値58.8±7.9点よりも有意に低値であった（図1）。

表1 両国男子・女子における体格比較

	身長(cm)	体重(kg)	BMI(kg/m <sup>2</sup> )	
男子	韓国 (n=91)	148.8**	44.2**	19.8**
	標準偏差	±7.4	±10.3	±3.4
	日本 (n=72)	142.6	36.3	17.7
	標準偏差	±7.3	±7.5	±2.6
女子	韓国 (n=76)	147.9**	41.1**	18.7**
	標準偏差	±6.5	±8.3	±2.9
	日本 (n=73)	143.5	34.7	16.7
	標準偏差	±7.9	±6.7	±2.1

\*\* : p<0.01

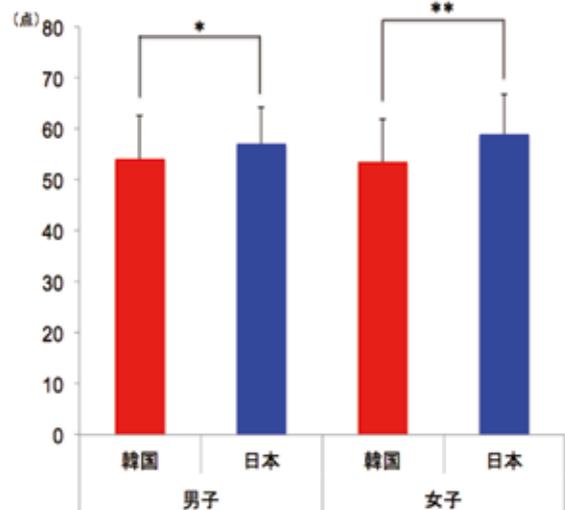


図1 両国男子・女子における体力合計点の比較 (\*\* : p<0.01)

### 2. 体育科教育課程

#### ① 目標

韓国の現行の2009改正体育科教育課程では、学校級別目標と科目目標の2つに区分して記載している。科目目標が「体育科の方向と役割」、「体育科で追究する人間像」、「体育科で志向する5つの身体活動価値領域」および「体育科の目標」に分けて記述されており、体育科の目標については以下のように設定されていた。

“체육과는 신체 활동 가치의 내면화와 실천을 통한 전인 교육을 목표로 한다. 즉 신체 활동을 통하여 활기차고 건강한 삶에 필요한 지식과 실천 능력, 자신의 미래를 계발하는데 필요한 도전 능력과 창의적

사고력, 공동체 생활에 필요한 선의의 경쟁과 협동 능력 등 바람직한 인성을 함양하는 것을 목표로 한다.”

(邦訳)「体育科は身体活動価値の内面化と実践を通じた全人教育を目標とする。すなわち, 身体活動を通じて活気あふれる健康な人生に必要な知識と実践能力, 自身の未来を啓発することにおいて必要な挑戦能力と創意的思考力, 共同体生活に必要な善意の競争と協同能力など, 望ましい人性を育成することを目標とする。」

以上のような大きな目標と, この下位目標として, 後に言及する小学校体育の目標, 小学校3・4学年, 小学校5・6学年それぞれの目標が定められていた。小学校体育における目標は, 以下の通りである。

“공교육에서 체육 교육이 이루어지는 시작 단계이므로 건강한 생활 습관 형성, 기초 체력 증진, 기초 운동 수행 능력 및 표현 능력, 운동 기법 습득, 여가 생활 태도 발달 등을 목표로 한다.”

(邦訳)「公教育で体育教育が施される始まりの段階として, 健康な生活習慣形成, 基礎体力の増進, 基礎運動遂行能力, ならびに表現能力, 運動規範の習得, 余暇生活の態度の発達などを目標とする。」

続いて, 特に5, 6年生における体育科の目標が記されていた。

“신체 활동의 가치를 실천할 수 있는 태도를 바탕으로 신체 활동의 기본 실천 능력을 기르는 것을 강조한다.”

(邦訳)「身体活動の価値を実践できる態度をもとに身体活動の基本実践能力を養うことを強調する。」

体育科の目標のその他の項目を見てみると, 体育教科を通じて体力(健康)ならびに運動能力を養い, 望ましい品性と社会性を育成することで, 個人的には健康で安全な生活習慣および態度を養おうとしていた。合わせて, 自己管理能力と対人関係能力, 創意力ならびに問題解決能力, 身体活動を継続して行う健康と体力などのような健康で活気あふれる人生に必要な能力を養うことができるとしている。さらに, 文化的には, 体育文化を創意的に継承・発展させられる資質をもてるようになり, 全人教育を大きな目標とし, それにふさわしい「인성(人格)」を育成することを最終目標としていた。

日本の小学校体育科の目標は「心と体を一体としてとらえ, 適切な運動の経験と健康・安全についての理解を通して, 生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てるとともに健康の保持増進と体力の向上を図り, 楽しく明るい生活を営む態度を育てる。」と設定されている。また, 1学年および2学年, 3学年および4学年, 5学年および6学年の低・中・高学年の3段階でより詳細な目標を定めている。体育科の目標においては「運動に親しむ資質や能力の育成」, 「健康の保持増進」および「体力の向上」の3つの要素を重要なねらいとしている。具体的には生涯スポーツの基礎をつくるために, 運動への関心や意欲, 運動の技能などを育て, 生涯を通じて運動を日常生活の中に積極的に取り入れ, 生活の重要な一部とすることを目指し, 身近な生活における健康・安全に関する内容を実践的に理解することを通して, 自らの生活行動や身近な生活環境における学習課題を把握し, 改善することができる資質や能力の基礎を培い, たくましく生きるための体力向上を図るための実践力を身につけることが必要であると示している。その他にも, 児童の心身ともに健全な発達を促すために, 運動による心と体への効果, 健康, 特に心の健康が運動と密接に関連していることなどを理解することの大切さなども示している。さらに各学年の目標及び内容の項目に記されている5, 6年生の目標は以下のようななっ

ている。

- 「(1) 活動を工夫して各種の運動の楽しさや喜びを味わうことができるようにするとともに、その特性に応じた基本的な技能を身に付け、体力を高める。
- (2) 協力、公正などの態度を育てるとともに、健康・安全に留意し、自己の最善を尽くして運動をする態度を育てる。
- (3) 心の健康、けがの予防及び病気の予防について理解できるようにし、健康で安全な生活を営む資質や能力を育てる。」

## ② 授業時数 (表2)

韓国においては、表示が2学年まとまるとの時数となっており、5、6年生では204単位時間となっていた。韓国の小学校授業の1単位時間は40分であった。1、2学年の体育においては「楽し

表2 両国の年間授業時数の比較

(単位時間)

学年 国	1	2	3	4	5	6
日本	102	105	105	105	90	90
韓国	(楽しい生活)384		204		204	

い生活」という音楽・美術・体育を含んだ統合教科の中で扱っており、年間授業時数は384単位時間であった。日本の体育科授業時数を見てみると、5、6年生の授業時間数はそれぞれ90単位時間ずつとなっており、1単位時間は45分である。5、6年生の日本の授業時数と比較してみると、24単位時間、韓国の授業時数が多いことになる。しかしながら、両国の1単位時間が異なることを考慮し、時間(分)に換算してみると、5、6年生では韓国が60分、すなわち1時間分だけ授業時間が多いことがわかった。韓国においては時数に関係した制度がある。まず、学校の特性や学生・教師・保護者の要求や必要に応じて、学校が教科別に20%の範囲内で時数を増減できるという制度である。また、集中履修制と呼ばれる小・中・高で適

用されている授業編制方式であるが、これは、科目別の授業時間数さえ満たせば、授業を行う学年や学期を各学校が自由に定められるという制度であった。

## ③ 運動領域の内容構成

韓国においては、前回からの改正点で最も変化が大きい部分が運動領域の内容である。健康活動・挑戦活動・競争活動・表現活動・余暇活動の大きな5つの領域に分けられていた(表3)。

下位項目として中領域とされるそれぞれの活動に基づいた内容が定められていた。その内容も初等学校3学年から高等学校1学年まで系統性をもたせ、重複がないように配慮されていた。また、日本における保健領域に該当する内容は、健康活動で多く扱われ、日本同様3学年から学習することになっていた。さらに、表4で示した通り、中領域についても内容体系および身体活動の例示を示すなど詳細に記されていた。改正により、3～6学年の健康活動の内容の体力管理、保健、安全についての内容が再構成され、他にも2007改正教育課程で提示されていた挑戦活動の内容の4学年と6学年の内容が入れ替わっているなどが改正の特徴であった。韓国の教育課程における運動領域の内容構成では、5つの大領域、中領域の名称はかなり大まかであって、身体活動活用例示は示されているものの、学校体育の授業で扱う詳細な内容に関しては、学校・教師側に裁量権が委ねられていることが明らかになった。

日本においては、各学年6つの運動領域と1つの保健領域に分けている。運動領域では、発達の段階のまとまりを考慮するとともに、基礎的な身体能力を身に付け、運動を豊かに実現していくための基礎を培う観点から、発達の段階に応じた指導内容の明確化・体系化を図っている。また、系統性を重視し、児童にとって易しい運動を取り組ませることで運動の楽しさや喜びを味わわせながら技能を身につけることを強調している。保健領域では、身近な生活における健康・安全に関する基礎的な内容を重視し、健康な生活を送る資質や

表3 運動領域の内容構成（韓国）

大領域	中領域		
	1, 2学年	3, 4学年	5, 6学年
健康活動	楽しい生活	健康と生活習慣	健康と身体発達
		健康と体力形成	健康と災害安全
挑戦活動		速度挑戦	距離挑戦
		動作挑戦	標的／闘技挑戦
競争活動		回避型競争	フィールド型競争
		領域型競争	ネット型競争
表現活動		動きの表現	民族表現
		リズム表現	主題表現
余暇活動	家族と余暇	生活環境と余暇	
	伝統遊びと余暇	自然環境と余暇	

表4 教育課程が示す運動領域の学年別 身体活動活用例示（韓国 小学校5, 6年生）

大領域	中領域	5～6学年 身体活動の活用例示	
健康活動	(1) 健康と身体発達	・ストレッチ, ヨガ, 腕立て伏せ, 腹筋運動, ウエイトトレーニング, 長距離走, 自転車, 縄跳びなど	・男女の身体成長, 性暴力の予防方法と対処方法など ・運動障害の予防活動, 運動障害の対処行動など
	(2) 健康と災害安全	・垂直跳び, 左右に跳ぶ, 全力疾走, ボールを投げて取る, 往復走りなど	・飲酒, 喫煙の実態ならびに被害, 禁酒ならびに禁煙 広報活動など ・火災ならびに自然災害などの予防活動, 対処行動など
挑戦活動	(1) 距離挑戦	・高跳び, 幅跳びなど ・ボール投げ, 打って送る (バッティング) など	
	(2) 標的／投技挑戦	・お手玉投げ, トッホ, ダーツ, PK戦, 簡易ゴルフ, 簡易ボーリングなど ・シルム, テコンドー, 柔道, 鉄拳など	
競争活動	(1) フィールド型競争	・野球型ゲーム, クリケット型ゲーム, ティーボール型ゲーム, キンボール型ゲームなど	
	(2) ネット型競争	・バレーボール型ゲーム, ジョック型ゲーム, フィリಂಗ型ゲーム, プレイスコープ型ゲーム, バドミントン型ゲームなど	
表現活動	(1) 民族表現	・我が国の民族舞踊 (ソゴチュム, タルチュム, カンガンスルレ, ノンアンムなど) ・外国の民族舞踊 (演歌, パーティーケーキボルカ, エイスオブダイヤモンド, グスタフスコール, トロイカ, マイム, ティニクリンなど)	
	(2) 主題表現	・組体操, 実用舞踊, 創作舞踊など	
余暇活動	(1) 生活環境と余暇	・長縄跳び, インラインスケート, フリスビー, ブーメラン, ダンススポーツ, エアロビクス, ヨガ, 音楽縄跳びなど	
	(2) 自然環境と余暇	・登山, ラフティング, スキー, 自転車ハイキング, キャンプなど	

能力の基礎を培う観点から内容を設定している。

④ 指導内容・方法

指導や学習のねらいが記載されており、創意的に問題を解決し人格を養える多様な学習活動を提供し、創意性ならびに人格教育に必要な要素を学習者が主導的に探索、認知、判断し、実践できる指導・学習環境を整えることや、身体活動に対する児童の興味、運動技能、体力、性差、学習有形などを考慮した多様な水準別授業を実施するよう促されていた。また、児童自らが活動状況の中で

内容領域別の主要概念を理解し、課題を克服し反省する自己主導的な指導・学習の環境づくりや、身体活動学習のために直接的な学習活動と間接的な学習活動（例：読み、書き、鑑賞する、調査する、討論するなど）を含んだ統合的な活動を並行すること、効率的な指導や学習のための方法選定と活用など、詳細に留意点が記されていた。さらに、表5のような創意的・人格教育を行う上で参考になるような活用方法の例示を提示されていた。

指導・学習の事前計画として教育課程に沿って内容の特性や平等な学習機会の提供、実際の授業

表5 領域別創意・人格 教授・学習方法の活用例示（韓国）

区分	活用例示	創意ならびに人格要素
健康活動	創意 昼食時間の食品の栄養群を分析する	類推／隠喩的思考, 論理／分析的思考, 好奇心／興味, 感受性
	人格 自身の興味と水準に合うように自立的な体力運動を計画し実践する	自律性
挑戦活動	創意 運動用・器具の発展による記録向上は真性な人間の能力向上と言えるかということについて討論する	批判的思考, 論理／分析的思考, 複合的性格
	人格 挫折を克服した有名選手の伝記（逸話）を鑑賞する	自己調節
競争活動	創意 戦争とスポーツでの競争の共通点と相違点を比べる	論理／分析的思考
	人格 技能水準が低い学生のためのゲームを考える	配慮
表現活動	創意 与えられた器具に適合した新しい体操動作を創る	論理／分析的思考, 獨創性, 多様性, 開放性, 想像力, 好奇心／興味
	人格 創作舞踊の発表時に主人公を任された人についての討論を行う	公平
余暇活動	創意 他国の余暇活動を体験し価値を見いだす	感受性, 多様性, 開放性, 没入, 好奇心／興味
	人格 余暇の内容が充実するように工夫した事例を調査し自身の生活で適用する	主導性

時数及び学級人員の規模の決定、施設や用・器具についてなど考慮すべき点が挙げられていた。続けて、実際の授業時に多様な環境や媒体を活用することや安全への配慮など全体に対する重要点を挙げたのち、表6に示した内容領域別の指導という項目を設け、各領域におけるねらいが示されていた。

日本における指導内容に該当する部分は、学年目標及び内容の項目（第5学年及び第6学年の目標及び内容）に記されている。日本においても各領域におけるねらいや指導の際の運動例示を示している。また、指導計画の作成と内容の取り扱いという項目において、指導計画を練るにあたって配慮すべき点、留意する点などを示している。

### ⑤ 評価

韓国の体育科教育課程では、評価の項目があり、

“평가는 교육과정의 연계성, 평가 내용의 균형성, 평가 방법의 타당성과 신뢰성을 확보하여야 하며, 창의·인성 교육과 개인차를 고려한 평가 기준을 수립하여 적용하도록 한다.”

（邦訳）「評価は教育課程の連携性、評価内容の均衡性、評価方法の妥当性と信頼性を確保すべき

であり、創意・人格教育と個人差を考慮した評価基準を樹立し、適用するよう心がける。」

と方向付けられ、さらに評価の計画については、

“학생의 학업 성취도를 측정하고, 평가를 통하여 교육의 효과를 향상시키기 위해 평가 계획을 구체적으로 수립한 후, 학년 초 또는 학기 초에 이를 학생들에게 공지하도록 한다. 종합적이고 공정한 평가가 이루어질 수 있도록 평가 계획 수립 시 학교의 평가 지침을 토대로 평가의 내용, 기준, 방법, 도구 등을 마련한다.”

（邦訳）「学生の学業成就度を測定し、評価を通じて教育の効果を向上させるために、評価の計画を具体的に樹立した後、学年初めあるいは学期初めにこれを学生たちに公示する。総合的で公正な評価がなされるよう、評価計画樹立時、学校の評価の指針をもとに評価の内容、基準、方法、道具などを整える。」

と記されていた。そして、指導した内容に対する効果的な評価に合う方法を選択あるいは追加し活用するが、一部の評価内容もしくは評価方法に偏ることがないように留意するよう促し、表7のよ

表6 内容領域別における指導のねらい（韓国）

領域	ねらい
健康活動	① 児童が健康と体力の重要性を認識し、家庭および学校生活できちんと実践するために体力運動の過程を自ら点検できるようにし、持続的な激励と称賛を受けられるよう指導する ② 健康で安全な心身の維持ならびに発達に必要な基礎知識を育成し、家庭および学校生活で実践できる態度を養えるよう多様な映像と実習活動を活用し指導する
挑戦活動	① 児童の興味と発達段階を考慮し、遊びまたはゲーム中心で基本の動き能力を指導する ② 児童が学習に興味がないよう地域社会の施設、放送媒体、競技観戦などを多様に活用し指導する
競争活動	① 児童の興味と発達段階を考慮し、遊びまたはゲーム中心で基本の動き能力を指導するが、行き過ぎた競争心を誘発しないように指導する ② 部分的な技能習得に重点を置くよりは、多様な簡易ゲームを通じて問題解決ならびに状況判断能力などのような創意的思考力を養えるよう指導する
表現活動	① 動作および順序の習得よりは、多様な表現方法の体験に焦点を当てて指導する ② 生活周辺の素材や主題を探索できる機会を提供し、生活道具や小物などの多様な資料を活用し、個人あるいはグループ別に表現し鑑賞できるよう指導する
余暇活動	① 校内・外の体育施設や修練場などを積極的に活用し、身体的な余暇活動に対する児童の体験機会を広め、参加の楽しさをたくさん感じさせられるよう指導する ② 家族単位または同年代集団の余暇活動を勧め、保護装具着用の確認や点検ならびに安全点検の態度を身に付け、習慣化させられるよう指導する

表7 評価内容、方法ならびに活用例示（韓国）

小学校（3～4年生、5～6年生）				
区分	評価内容	評価方法例示	活用例時	
健康活動	—理解力 —健康運動遂行能力 —健康実践能力 など	—自筆検査 —体力検査	—チェックリスト —健康日誌 など	体力の種類と特徴に関する○×クイズ大会を開く（自筆検査）
挑戦活動	—理解力 —運動遂行能力 —規範実践能力 など	—自筆検査 —個人（またはグループ）別 運動技能検査	—チェックリスト —授業日記 —感想文 など	50m走の記録を測定し、技能の向上度を比較する（運動技能検査）
競争活動	—理解力 —運動遂行能力 —規範実践能力 など	—自筆検査 —個人（またはグループ）別 運動技能検査	—チェックリスト —授業日記 —感想文 など	バレーボール型ゲームでの戦略を図で表し、説明する（戦術的意思決定能力評価）
表現活動	—理解力 —表現力 —創意力 —鑑賞能力 など	—自筆検査 —個人（またはグループ）別 表現能力検査	—チェックリスト —感想文 など	自身の学級の1日を主題に創作表現をする（創意的表現能力検査）
余暇活動	—理解力 —運動遂行能力 —余暇実践能力 など	—自筆検査 —運動技能検査 —チェックリスト	—体験報告書 —余暇実践日誌 など	昼食時間を利用した長縄跳びに対する計画を立て、実践する（余暇実践日誌）

うな内容領域別の評価内容、方法ならびに活用の例示が示されていた。

最後に、評価結果の活用という項目において、評価結果は分析し学習課題の水準と活動方法を決定するための基礎資料や教授・学習方法の改善等に活用することとされていた。特に、個人別評価結果を進路教育や余暇活動教育と連携し、健全で面白みのある身体活動の計画を立て、実践するた

めの基礎資料としても扱うよう指示されていた。しかしながら、運動領域の内容構成同様、詳細な評価規準の設定に関しては学校や教師に委ねられていた。

日本の学習指導要領では、評価に関する項目や詳細な記述はない。しかしながら、国立教育政策研究所（2011）において詳細が明示されている。まず、評価規準については、学習指導要領で示す

各運動領域の目標や内容(運動または技能, 態度, 思考・判断)のめあてに照らして, その実現状況・学習を観点別に評価(学習評価)する。学習評価を行うための評価規準は各学校で設定するものであり, 児童の学習状況を判断する際の目安が明らかになり, 指導と評価を着実に実施することにつながるとしている。また, 各学校では組織的・計画的な取組を推進し, 学習評価の妥当性, 信頼性等を高めるよう努めることが重要であるとも述べている。さらに, 内容の運動領域や保健領域において評価基準に盛り込むべき事項及び評価基準の設定例を学年群・観点別に提示している。日本においては, 各学校の評価基準は学習指導要領に基づいた資料をもとに各学校が評価規準を設定している。

## 考 察

### 1. 体格および体力・運動能力について

体格については, 韓国において児童や青少年の平均身長・体重などの体格が増加していること(김순기・김광희, 2004)が報告されており, このような結果は, 韓国内で昔と比較して食生活が改善されたため, あるいは遺伝的または民族的な差異の影響によるものであると考えられる。しかしながら, 体格が大きくなった反面, 肥満児童が増加していることが問題として提起されている。한환옥(2006)は, 過体重の小学生が自分が過体重になった原因について, 運動不足であると自覚しており, 食生活等生活習慣はもちろんであるが, 運動習慣の改善の必要性を示唆している。

合計点において, 男女ともに日本児童と比べて韓国児童が有意に低い値を示した(図1)。このことから, 韓国児童の体力・運動能力が低いことが示唆された。これは, 이종완(2006)が韓国の小学校児童は男女ともに日本児童に比べて, 体格は大きい, 体力は相当低下していると報告した先行研究と同様な結果が得られた。

### 2. 体育科教育課程の比較

韓国児童の体力・運動能力が低かった事を受けて, まず, 韓国の体育科教育課程で定められている時数は日本と大差なかったが, 時数に関するいくつかの制度のため正規の単位時間数で行われていないことが推察された。안양옥(2010)は体育の授業時数が計画された時数に比べて不足していたり, 体育が大学入試に関係のない科目であるため主要科目が優先されたりすることを指摘しており, 体育科の授業が正常に行われていないことが考えられる。

細かい運動領域の内容構成について見ていくと, 5, 6年生の健康活動(縄跳び, 垂直跳びなど)や挑戦活動(高跳び, 幅跳び), 余暇活動(音楽縄跳び)の中で幅広く'跳ぶ'動作が含まれている運動を扱っている。また, 健康活動や挑戦活動ではボール投げ, 競争活動では野球型ゲームやニュースポーツであるティーボール型ゲームなどが挙げられ, '投げる'動作も含まれている(表4)。しかしながら, 健康活動において体力健康活動が中心とされているが, 具体的にどのような運動を行うべきか, 教育課程において記載はされていないことや, 健康活動で示されているが, 長距離走, 全力疾走, 往復走ほどの内容しか見当たらないなど, 運動に偏りが見られる。また, 3, 4年生の内容と比較してみると, 3, 4年生では挑戦活動では短・中距離走をはじめとしたトラック競技や水泳が扱われ, 競争活動ではバスケットボール型ゲーム, サッカー型ゲームなど比較的身体活動の多い種目が組み込まれており, 5, 6年生よりも身体活動量の多い内容が多く扱われている(表8)。

このような運動内容の学年差が本研究における韓国児童の体力・運動能力の低さに繋がったとも予想される。しかしながら, 韓国における体育科教育課程は枠組みとして設けられているのみであり, 扱う内容の決定は各学校に委ねている現状から, 内容の形骸化が起こっている可能性や各学校での体育の授業内容における格差が生じている可能性も否めないが, 本研究における体育科カリキュラムの結果からは韓国児童の体力が低い要因

表8 教育課程が示す運動領域の学年別 身体活動活用例示（韓国 小学校3, 4年生）

大領域	中領域	3～4学年 身体活動の活用例示	
健康活動	(1) 健康と生活習慣	・体操, ストレッチ, 音楽に合わせて体操, エアロビクス, 縄跳びなど	・正しい姿勢法（座る, 歩くなど）, 手を洗う, 歯磨きうがい, 掃除など ・室内での安全な生活, 家庭の安全事故の予防方法, 応急状況の対処行動など
	(2) 健康と体力形成	・腕立て伏せ, 腹筋運動, マットの上で転がる, バランスを取る, 鉄棒にぶら下がる, 全力で走る, 往復で走る, 跳躍競技	・給食方法, 食品の選択ならびに保管方法など ・登下校時の安全な登校方法, 学校安全事故の予防方法, 簡単な応急処置法など
挑戦活動	(1) 速度挑戦	・短・中距離走, 長距離走ならびに歩き, リレー競争, 障害物競争, 競歩など ・背泳ぎ, 自由形, 平泳ぎ, バタフライなど	
	(2) 動作挑戦	・体操, マット運動, 跳び箱運動, 平均台運動など ・テコンドーの形, あるいは正確な姿勢と動作の順序が重要視される一連の活動	
競争活動	(1) 避ける型競争	・打つ（タッグ）型ゲーム, ボールを避ける型ゲームなど	
	(2) 領域型競争	・ラグビー型ゲーム, バスケットボール型ゲーム, ハンドボール型ゲーム, サッカー型ゲーム, ホッケー型ゲーム	
表現活動	(1) 動きの表現	・移動の動き（ランニング, スキップ, ステップ, ジャンプ, ホップなど）, 非移動の動き（曲げる, かがめる, 回す, ねじる, はたく, 揺らすなど）, 操作の動き（投げる, 受ける, 蹴る, 打つなど） ・表現要素（身体, 空間, 努力, 関係など）による身体活動（他の人の動作によってする, まね遊びなど）	
	(2) リズム表現	・こん棒体操, ボール体操, リボン体操, フープ体操など ・音楽に合わせてリズムをとる, 音楽縄跳び, 即興表現など	
余暇活動	(1) 家族と余暇	・縄跳び, ジョギング, キャッチボール, フリスビーなど ・バドミントン, ボーリング, 水泳, 野球, サッカー, 卓球など ・スケート, スキー, インラインローラー, 自転車, 登山など	
	(2) 伝統遊びと余暇	・サバンチギ, ピソクチギ, ジャチギ, タクチチギ, クスルチギ, コンギノリ, トゥホ, ユンノリ, ヨンナリギなど ・キマノリ, ジンノリ, ジュルタリギなど	

を明確にすることは困難であるため、今後はより学校体育に近接した調査の必要性があると思われる。

その他、学校体育を取り巻く環境として、現行の教育課程では、体力低下や健康問題への対策について言及しており、小学校では誰でも安全にスポーツを楽しめるようにニュースポーツの導入も進んでいる。また、小学校によっては体育専門の점담교사（専任教師）が配置されており、人数も年々増加していること（문화체육관광부, 2012）など、体育科を改善しようとする工夫がうかがえる。しかしながら、体育科の目標において体力の向上や健康の維持が唱えられているにもかかわらず、改善傾向に至らない要因である問題点が未だ多く挙げられる。例えば、韓国の小学校における体育館（兼講堂）所持率は76.2%、水泳場は1.4%、グラウンドは18.0%（문화체육관광부, 2012）と体育施設が未だ十分に設備されていない状況であり、中でも5, 6年生の運動領域の中で水泳を扱っ

ているにもかかわらず、水泳場を持っている学校はわずか1.4%となっていることから運動内容に限界があることがうかがえる。また、女性教師の割合が大きいということから、テコンドーや씨름（シルム）などの武道のような女性にはあまり経験の少ない運動種目を扱う場合の問題が生じることが予想される。他にも、崔ほか（2012）は、女子大学生を対象としたインタビュー結果から、体育授業での男女不平等や、小学校・中学校・高等学校での反復的な基礎練習のみの学習について指摘しており、学年群における内容の重複についても曖昧になっている可能性が示唆される。さらに緒言でも述べたように、現在、韓国においては教育熱の高さゆえ、子どもの学習時間が増加し、学校や塾以外の自由な時間が減少している状況である。정승（2005）によると、韓国児童たちは平日の放課後、いわゆる余暇（自由）時間に行っていることを調査した結果、学習塾等の勉強をして過ごす児童が30.1%、TV視聴が21.3%、コンピュー

ターゲームが10.0%と運動やスポーツなど体を動かすことに関係する回答はあまり見られなかった。さらに、調査対象者422人中、習い事や塾に通う児童は約333人(79.1%)とかなり多かったが、そのうち運動系の習い事である体育館に通う児童は約32人(9.7%)であることが報告されている。そのため、韓国の子どもたちにとって学校体育は貴重な身体活動経験の時間であり、学校体育の充実が重要であることが推察される。

## まとめ

本研究では、韓国および日本の小学生児童を対象に体格および体力・運動能力の測定を行い、両国の体育科教育課程を比較し、今後の韓国における体力低下や肥満問題をはじめとした諸問題の解決策を見いだすための知見を得ることを目的とした。結果は以下の通りである。

### 1. 体格および体力・運動能力について

体格については、男女ともに身長、体重およびBMIにおいて、日本児童と比べて韓国児童が有意に高値を示した。

体力・運動能力については、全体の指標である体力合計点を見ると、男女ともに日本児童に比べて韓国児童が有意に低値を示した。

### 2. 体育科教育課程について

目標では日本同様、体力向上や健康の保持増進を掲げているが、制度によって定められた授業時数より20%の増減が可能であることがわかった。また、運動領域の内容構成同様、詳細な評価規準の設定に関しては学校や教師に委ねられていた。

以上のことから、体格は日本児童に比べて大きい、体力・運動能力では韓国児童が劣っていた。これは、体育科教育課程の内容の形骸化や、学校による格差の発生が懸念された。学校体育の内容の形骸化については従前から指摘されており、学校外における身体活動経験が多く見込めない韓国児童においては、学校体育の充実を図ることが体

力低下や肥満問題を改善するにあたって重要であることが示唆された。

今後は本研究で得られた結果を踏まえて、幅広い学年の体力・運動能力の測定とともに、調査対象校、学年の年間指導計画や学校での取り組みなどを照らし合わせて見ていくことが重要であると考えられる。また、韓国における体力低下や肥満問題など子どもを取り巻く問題の改善策を見いだすためにも、学校体育の授業現場・内容の実態を把握する必要があるのではないと思われる。

## 引用・参考文献

- 崔允敬・井上洋一(2012)韓国女子学生の体育・スポーツ活動の実態および意識に関する研究：ソウル市の江南8学群地域を対象に。奈良女子大学スポーツ科学研究(14), 45-54.
- 한환옥(2006) 도서지역 초등학생들의 비만실태와 비만요인 분석. 대구교육대학교 교육대학원 석사학위논문.
- 정송(2005) 초등학교 학생들이 방과후 여가시간 활용 실태 분석 1) 충북대학교 교육대학원 초등교육전공 석사학위 청구논문.
- 김순기·김광희(2004) 키 키움. 도서출판 무지개사: 서울.
- 교육과학기술부(2012) 제2011-361호 [별책11] 체육과 교육과정: 서울
- 이다영·구봉진(2011) 한국과 일본의 개정 초등학교 체육교육과정 비교분석. 한국일본교육학연구, 제16권(1): 87-103.
- 이중완(2006) 한국과 일본 초등학생들의 체격 및 체력요인 비교분석. 한국초등체육학회지, 제12집, 1호, 87-95.
- 이옥선·전세명(2012) 초등학교 여학생 건강 및 체력 증진을 위한 학교 체육 프로그램의 구성 방향과 실제. 한국초등체육학회지, 제17권(4): 143-156.
- 이양구(2012) 체육활동 활성화 전개를 위한 '운동하는 초등학생'의 건강관련체력과 비만의 관련성. 한국초등체육학회지, 제18권(2): 223-234.
- 문화체육관광부(2012) 2012체육백서.
- 文部科学省(2008)小学校学習指導要領解説 体育編. 東洋館出版社: 東京.
- 文部科学省(2011)子どもの体力向上のための取組ハンドブック, [http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/sports/detail/\\_icsFiles/afieldfile/2012/07/18/](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/sports/detail/_icsFiles/afieldfile/2012/07/18/)

1321174\_04.pdf (最終参照日2014年12月13日)

文部科学省 (2014) 平成25年度学校保健統計調査, [http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/other/\\_icsFiles/afildfile/2014/03/28/1345147\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afildfile/2014/03/28/1345147_1.pdf) (最終参照日2015年1月10日)

国立教育政策研究所 (2011) 評価規準の作成, 評価方法等の工夫改善のための資料 (小学校体育), [http://www.nier.go.jp/kaihatsu/hyouka/shou/09\\_sho\\_taiiku.pdf](http://www.nier.go.jp/kaihatsu/hyouka/shou/09_sho_taiiku.pdf) (最終参照日2014年12月10日)

佐々木邦彦 (2011) 韓国の学校体育. 笹川スポーツ財団研究レポート, <http://www.ssf.or.jp/topics/external/>, (最終参照日2014年12月9日)

(秋月 茜 北海道医療大学大学院博士課程  
リハビリテーション科学研究科)

(神林 勲 札幌校教授)